

結果概要

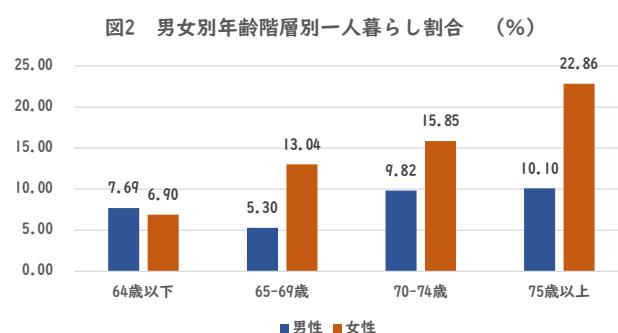
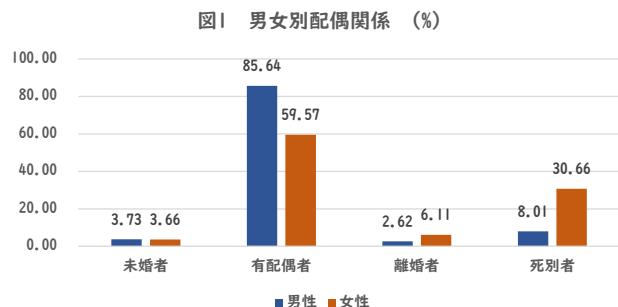
「中高年者の生活実態に関する継続調査」8ウェーブ

<調査対象者>

2010年以来、2年毎に実施されてきた「中高年者の生活実態に関する継続調査」第8回ウェーブは2024年1月に実施されました。2020年に50代の追加サンプルを含め、第8回調査では、54歳から97歳の男女それぞれ1,082人、計2,164人から回答がありました（回収率は80.4%）でした。

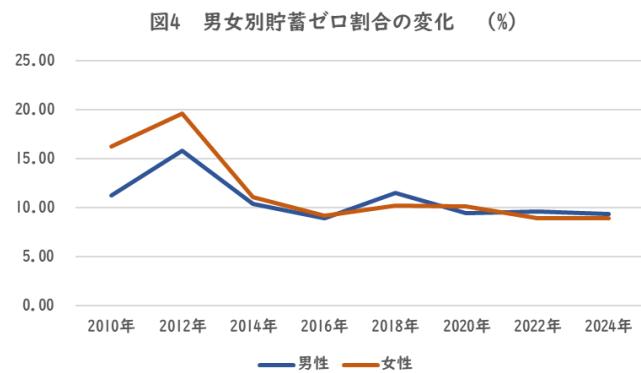
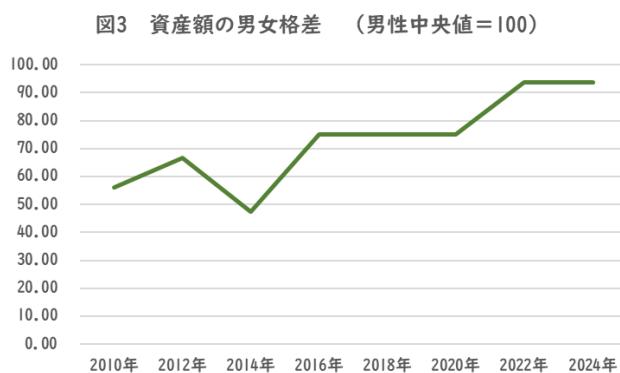
本概要では、2010年から2024年にかけて継続して回答をいただいた方について結果を報告します。2024年1月時点で、男女別の配偶関係をみると、男女ともに最も多いのは有配偶者で、男性85.6%、女性59.6%でした（図1）。ただ、同数値は2年前と比べて、女性は3ポイント、男性は1ポイント減っていました。同時に、女性の31.7%が死別者となり、この2年間で同じ3ポイントの上昇がみられました。

一人暮らしの割合を年齢階層別にみてみると、女性の高い割合が明らかになりました（図2）。75歳以上になると、約5分の1以上の女性が一人暮らしをしていました。全体としては、前回調査に比べて1ポイント程度の上昇でした。



<2010年以来の変化：経済状況・気持ち・生活>

2010年以来の資産や意識の変化を男女別に各ウェーブの平均でみてみましょう。まず、平均的な全資産額の男女格差（男性中央値を100とした場合）の変化です（図3）。全体として格差は縮小傾向にあり、その背景には女性の全資産額の上昇があります。そこではおそらく、死別した夫から資産を相続したことが理由の一つとして考えることができます。その一方で、貯蓄が全くない者の割合についてみてみると、男女共に貯蓄ゼロ割合は1割弱と、この10年ほど概して安定しています（図4）。



次に、意識の変化についてみてきましょう。まず、「社会を 10 つの階層に分けるとすると、自身の生活水準からみて、あなたはどの階層にいると思いますか」という質問への回答（階層帰属意識）の変化を見たのが図 5 です。2010 年から 2012 年にかけて一時的にジャンプが見られますが、2014 年以降、比較的安定しています。あえていうなら、女性の方が 2018 年に下がってその後緩やかに上昇する傾向が見られます。一般的な生活満足度の変化はどうでしょう。図 6 がその結果です。コロナ禍の 2020 年に男女ともに生活満足度が下がりますが、その後、男女共に上昇傾向にあります。特に、女性については、コロナ禍を経て 2024 年までの上昇が明らかです。高齢期に入って年齢と共に生活満足度が上昇する結果もみられるので、ここでは加齢効果であるとみるのが妥当かもしれません。では、どうして年を重ねると生活満足度が上がるのか。その理由をあきらかにするにはもう少し詳しい分析を進めなくてはなりません。

図5 男女別階層帰属意識（10ポイント）の変化

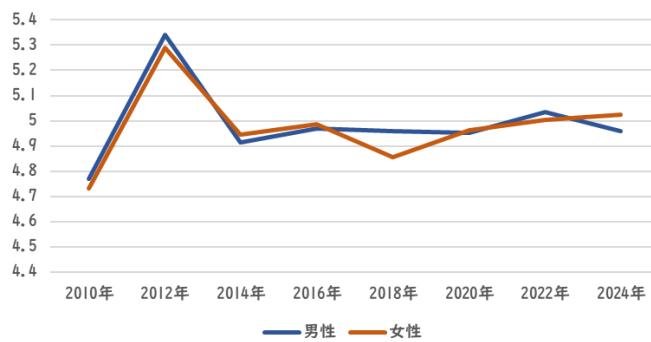
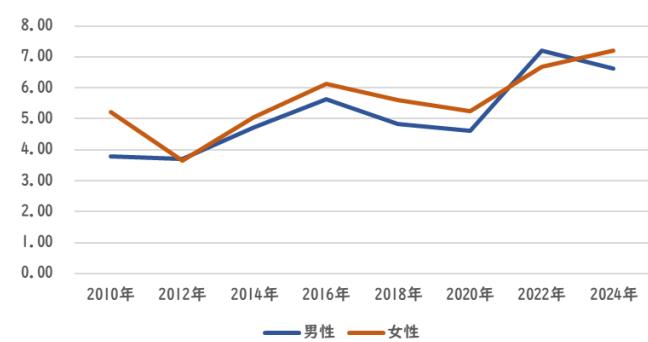


図6 男女別満足度スコアの変化



一般的な信頼度の変化は図 7 です。こちらも男女共に上昇傾向にあり、女性の間での上昇が 2022 年から 2024 年にかけて大きいことがわかります。社会に対する一般的な満足度も高齢になるほど上がる傾向がここでも確認され、その傾向は程度に差はあるものの男女ともに共通しています。では、心理的なストレスの程度の変化はどうでしょう（図 8）。心理的なストレスは女性の方が平均的に高く、2018 年から 2022 年にかけての上昇も男性よりも大きいことが見て取れます。ただ、2024 年には、女性のストレス値が下がり、逆に男性の値が上昇しているので、男女差が縮小しています。

図7 一般的の信頼度の変容

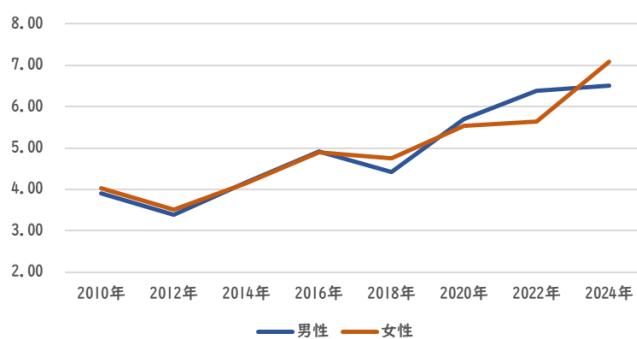
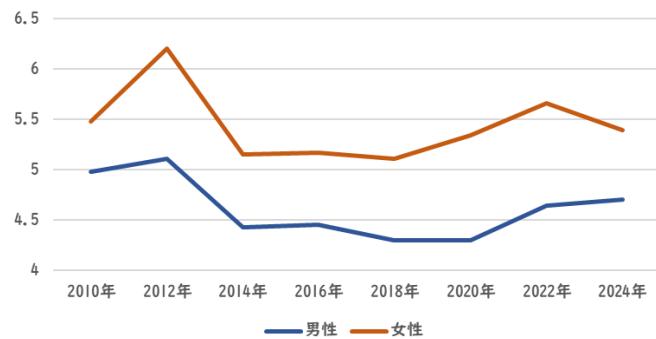


図8 男女別心理的ストレ程度（K6）の変容



以上、本調査が開始された 2010 年から 2024 年という 14 年間の変化を記述しました。人々の意識からみて、第 8 ウェーブに着目すると、男女の間で異なる動きが垣間見されました。調査対象者の配偶関係や家族類型の違いは男女の間で小さくないので、その違いが意識や生活状況に今後どのような影響を及ぼすかについてはさらなる分析を進めます。2020 年以降のコロナ禍の影響についても、さらなる考察をすすめていきます。